Akita University

原著：秋田大学医短紀要 9 (2)：179－189，2001

卒業生とその上司による本学の理学療法教育への評価

上村佐知子　工藤俊輔　進藤伸一
若山佐一　佐竹將宏　籾山日出樹
大澤諭樹彦　稲場斉　塩谷隆信

はじめに

本学では、平成6年、8年、12年の3回にわたり、学内の教育に対する自己点検・評価を実施し、より質の高い医療従事者の育成を目的に、教育内容や教育環境について改善努力を行ってきた。本研究は、第3回の自己点検・評価で実施された過去7年の理学療法学科卒業生へのアンケート結果[1]の一部を分析したものである。特に、(1) 本学の卒業生に対する卒業生自身の自己評価とその上司の評価、(2) 本学の理学療法教育に対する卒業生とその上司の評価の2点に焦点を当てて分析、考察した。

方　法

アンケート調査は、本学理学療法学科の1期生から7期生の卒業生で、同窓会で住所が把握されている114名を対象に郵送法によって実施された。アンケート方法は、卒業生自身が回答する用紙の他に、卒業生の上司が回答する用紙を同封して郵送し、それぞれの回答後、別々に返送していただいた。

卒業生用のアンケート内容は、卒業生の個々の背景（性別、経験年数、勤務先の種類、勤務形態、勤務先の変更回数、学歴）と本学の教育満足度（講義・演習、臨床実習、卒業研究、教育全体）や医療専門職としての自己評価について、「良い」、「やや良い」、「普通」、「やや悪い」、「悪い」の5段階評価の記載を求めた。さらに、同年代の理学療法士と比較した場合の卒業生自身の「優れている点」、「努力を要する点」や本学の教育の改善点について記述式の回答を求めた。

一方、卒業生の上司へのアンケート内容は、上司の背景（経験年数や職種、職場の設置主体や部署の理学療法士数など）の他に、医療専門職としての卒業生に対する評価（5段階）、さらには卒業生の「優れている点」、「努力を要する点」と本学の教育に対する要望について自由記載を求めた。

なお、アンケートの詳細については、秋田大学医療技術短期大学部自己評価委員会 (2000) による「第3回自己点検・評価報告書－卒業生と卒業生の上司から見た評価－」を参照されたい。

分析方法は、卒業生の自己評価と上司の評価について、卒業生の背景や本学での教育満足度、卒業時成績、卒業生に対する評価との間に統計処理を行い、その関係性を分析した。このとき、「良い」、「やや良い」、「普通」、「やや悪い」、「悪い」の5段階評価については、それぞれ、5点、4点、3点、2点、1点の重み付けを行い、

秋田大学医療技術短期大学部
理学療法学科

Key Words：卒業生
上司
評価

Akita University

「良かった」、「どちらともいえない」、「悪かった」の3段階評価には、それぞれ3点、2点、1点の重み付けを行った。

また、同年代の理学療法士と比較した場合の卒業生自身の「優れている点」、「努力を要する点」と上司から見た卒業生の「優れている点」と「努力を要する点」について卒業生が記載したものと上司が記載したものについて比較を行った。さらに、卒業生による本学の理学療法教育の改善点、また卒業生の上司による本学の教育への要望を分析した。

結　果

卒業生のアンケート回収率は40.4%(46名)であり、その上司による回収率は42.0%(48名)であった。回答した卒業生の性別は、女性38名、男性8名であり、平均経験年数は、3.4年であった。また、1期生では2名、2期生では8名、3期生では0名、4期生では11名、5期生では10名、6期生では9名、7期生では6名が回答していた。

卒業生の本学教育の満足度は5段階評価の平均点で、講義･演習が3.2点、臨床実習が3.6点、卒業研究が2.5点であった。教育全体についての評価の平均点は3段階評価(「良かった」が3点)で2.3点であった(表1)。卒業生による医療専門職としての自己評価のうち、「やや良い」、「普通」と回答した者が36名(83.7%)であり、5段階評価の平均点は3.0点であった(表2)。上司による卒業生の「専門職としての技能、適性の総合評価」は「良い」「やや良い」が37名(77.1%)で5段階評価の平均点は4.2点であった(表3)。概ね上司の評価が卒業生の自己評価よりも高得点にあったが、2例につき、卒業生の自己評価が上司の評価を上回っていた。なお、卒業生と上司、双方の評価について相関関係は認められなかった(n=37, r=0.10, p>0.05)(表4)。

また、これらの評価と卒業生の背景や本学で

表1　卒業生の本学の教育に対する評価

講義･演習(n=46)	5(満足)	4(やや満)	3(普通)	2(やや悪)	1(悪い)	平均	SD
	3	13	21	9	0	3.22	0.81
	6.5	28.3	45.6	19.6	0	100	
臨床実習(n=46)	5(満足)	4(やや満)	3(普通)	2(やや悪)	1(悪い)	平均	SD
	8	18	12	8	0	3.57	0.98
	17.4	39.1	26.1	17.4	0	100	
教育施設･設備(n=46)	5(満足)	4(やや満)	3(普通)	2(やや悪)	1(悪い)	平均	SD
	14	11	12	9	0	3.41	1.07
	30.4	23.9	26.1	19.6	0	100	
卒業研究(n=44)	5(満足)	4(やや満)	3(普通)	2(やや悪)	1(悪い)	平均	SD
	2	7	13	14	8	2.53	1.12
	4.6	15.9	29.5	31.8	18.2	100	
教育全体(n=43)	3(良かった)		2(どちらともいえない)		1(悪かった)	平均	SD
	16		27		0	2.35	0.48
	34.8		58.7		0		

注;各欄中段は人数、下段は割合(%)を示す。

表2　卒業生の自己評価 (n=45)

自己評価	良い	やや良い	普通	やや悪い	悪い	平均	SD
回答数	0	8	28	7	0	3.02	0.38
%	0	18.6	65.1	16.3	0	100	

表3　上司による卒業生の評価 (n=48)

評価	良い(5)	やや良(4)	普通(3)	やや悪(2)	悪い(1)	無回答	平均	SD
回答数	22	15	8	2	0	1	4.21	0.88
%	45.8	31.3	16.7	4.2	0.0	2.1		

Akita University

表４　卒業生の自己評価と上司の評価の比較 (n=37)

卒業生の自己評価(点)	人数(人)	割合(%)		上司の評価(点)	人数(人)	割合(%)
4	7	18.9	→	5	4	10.8
				4	2	5.4
				3	0	0
				2	1	2.7
3	23	62.2	→	5	13	35.1
				4	8	21.6
				3	1	2.7
				2	1	2.7
2	7	18.9	→	5	2	5.4
				4	3	8.1
				3	2	5.4

NS:p>0.05有意差なし

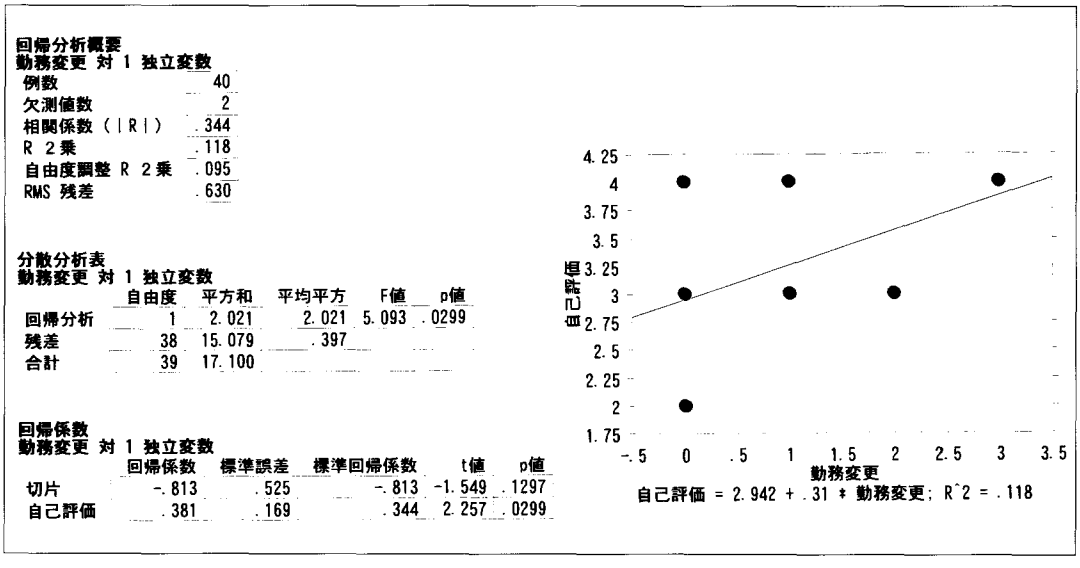

図１　卒業生の自己評価と勤務先変更回数との関係
(n=38, r=0.34, p<0.05 有意差あり)

の教育満足度、成績との間に重回帰分析を行った結果、卒業生の自己評価と勤務先の変更回数や上司の経験年数との間に弱い相関関係 (r=0.34, p<0.05, r=0.42, p<0.01) が認められた（図１，２)。

卒業生による同年代の理学療法士と比べて卒業生が優れている点は、仕事の能力に関するものが７件、接遇・連携・指導に関するものが６件、自己研鑽に関するものが６件、責任に関するものが３件、視点などに関するものが３件寄せられた。また、卒業生による卒業生自身が努力を要する点は、知識・技術に関するものが31件と圧倒的に多く、ついで学習意欲に関するものが９件、研究が５件、学習能力などが４件、接遇・教育に関するものが４件、環境調整に関するものが２件であった。つまり、「真面目に取り組んで仕事に責任を持つ」ことや「患者への対応と他職種との連携」は優れており、「知識と技術に対する学習意欲」、「論理的な考え方」、「研究、ケース検討、発表の熱意」等は努力を

Akita University

回帰分析概要
責任者経験年数 対 1 独立変数

例数	40
欠測値数	2
相関係数（|R|）	.425
R 2乗	.181
自由度調整 R2乗	.159
RMS 残差	8.463

分散分析表
責任者経験年数 対 1 独立変数

	自由度	平方和	平均平方	F値	p値
回帰分析	1	601.004	601.004	8.392	.0062
残差	38	2721.396	71.616		
合計	39	3322.400			

回帰係数
責任者経験年数 対 1 独立変数

	回帰係数	標準誤差	標準回帰係数	t値	p値
切片	-6.755	7.051	-6.755	-.958	.3441
自己評価	6.576	2.270	.425	2.897	.0062

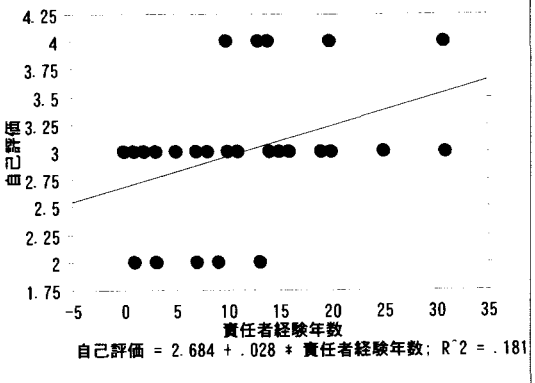

図2　卒業生の自己評価と責任者の経験年数との関係
(n=38, r=0.42, p<0.01 有意差あり)

要すると考えていることに要約できた(表5、6)。

上司から見た卒業生の優れている点は、能力に関するものが30件、常識・接遇・連携に関するものが22件、向上心・研究に関するものが19件、性格・個性に関するものが5件、その他が3件であった。一方、卒業生が努力する必要のある点は、知識・技術とその応用に関するものが14件、向上心・研究に関するものが13件、性格・個性に関するものが8件、常識・接遇・連携に関するものが6件、その他が5件であった。中でも、「言葉遣い、経済観念、協調性、専門職としての意識、生活の目的と目標」など一般社会人に必須である態度に欠点があるという指摘があった。「調査、研究、発表、研修を自分から進んで企画、立案、実行する意欲」、「知識技術の応用の柔軟性」に欠けているという指摘もあった(表7,8)。

卒業生による本学の理学療法教育の改善点は、ゆとりのあるカリキュラムに関するものが12件、授業内容に関するものが10件，実習量に関するものが5件、その他が5件であった。とにかく、「もっとゆっくり勉強できればよい」といった提案が多かった。また、実習や演習を盛り込んだ実践的な授業に対する意見、さらに、教科目、臨床実習の分野の追加についても意見があった(表9)。

また、卒業生の上司による本学の教育への要望は、学生の向上心や研究心に関するものが8件、常識・接遇に関するものが5件、能力に関するものが5件、カリキュラムに対する提案が4件みられた。「一般常識とともにリハビリテーション利用者に対する基本姿勢の涵養」、「医療人としての倫理観、社会観の確立」、「向上心、探求心、そして積極性、競争心を引き出す教育」、「問題解決能力の開発、研究活動」、さらには、「社会貢献」、「就職先に見合った専門性の教育」などといった内容であった(表10)。

考　察

＜卒業生の教育満足度＞

本学教育の満足度は、卒業研究以外は「普通」以上の成績であったが、卒業研究については個人的なばらつきも多く、平均が普通以下であった。その理由として「悪かった点」についての

Akita University

表5　卒業生による「卒業生の優れている点」（複数回答）

項目	内容
能力	問題解決能力
（7件）	仕事が速い
	臨機応変
	技術の習得の早さ
	多くの疾患を経験している
	一度興味を持つと集中してやり遂げること
	自分の意見を発言できる
接遇・連携・指導	患者との接し方(4)
（6件）	他職種との連携
	後輩・学生への指導
自己研鑽	解剖・生理学など基本的な知識についての勉強
（6件）	研究会や講習会への参加(3)
	自分から分からないことに対して学習すること(2)
責任	責任感
（3件）	真面目に仕事をしている（2）
視点	比較的広い視野で患者を見て目標を考える(2)
（3件）	物事を柔軟に受け入れられる
その他	健康運動指導士の資格を持っている
（2件）	健康であること、体力

表6　卒業生による「卒業生の努力する必要がある点」（複数回答）

項目	内容
知識・技術	知識(5)
（31件）	技術(6)
	基本的知識(2)
	専門知識(8)
	文献抄読等(5)
	社会資源の知識
	中枢の知識
	最近の知識・技術
	急性期の理学療法
	勉強不足
意欲	学習意欲(3)
（9件）	向上心・探求心の不足（2）
	研究への関心(2)
	専門技術への興味
	初心を失いかけている
研究	研究への取り組み(3)
（5件）	学会発表(2)
接遇・教育	人との接し方(3)
（4件）	後輩への教育
学習能力など	応用力
（4件）	理論的な考え方
	深く考えること
	説明する力
環境調整	助言してもらう機会がない
（2件）	時間がない

Akita University

表７　上司からみた「卒業生の優れている点」（複数回答）

項目	内容
能力など（30件）	知識(8)
	技術(5)
	広い視野(5)
	柔軟性(2)
	基礎的学力
	基本的評価
	理解度、学習能力
	優先順位の付け方など判断能力(2)
	地域医療を理解している
	評価治療のスピード
	まとめる力
	リハビリテーションシステムの精通性
	将来指導者として期待できる
常識・接遇・連携（22件）	患者との信頼関係の構築
	患者との接し方(5)
	職員との接し方(2)
	健康管理を含めた自己管理能力・勤務態度
	医師等他職種との連携
	一般社会人として優れている
	同僚・先輩・上司誰とでもｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝできる(2)
	チームの一員としての活動ができる(社会性)
	患者のプライバシーに干渉しない、職業的倫理観
	協調性(5)
	PTとしての姿勢(2)
向上心・研究（19件）	意欲(2)
	努力(7)
	研究熱心さ(3)
	気概
	上昇志向
	探求心(2)
	研修会・学会への参加
	目標や課題を持つ(2)
性格・個性（5件）	おおらか
	発想が豊かで、活動に対する発言が豊富
	PTとしての資質
	責任を持ち仕事をこなす
	非常に素直な心
その他（3件）	すべてに優秀、完璧
	県内で働こうとするスタンス
	現時点では特になし

Akita University

表8　上司からみた「卒業生の努力を必要とする点」（複数回答）

項目	内容
知識・技術など（14件）	応用力、柔軟性(3)
	基礎知識・技術(2)
	リハ概論の知識
	在宅支援
	リハプログラムの立案・展開
	専門職としての知識収集や技術習得
	深く洞察し、理論的に分析把握すること
	内容を整理して発言すること(3)
	立案・企画
向上心・研究（13件）	学会発表や誌上発表など(2)
	知識を増やす努力
	まったく新しいことに挑戦していく気概
	自分でテーマを決めての調査研究、特に独創性(2)
	与えられた仕事以外への取り組み姿勢
	県外で研修の場を持とうとする姿勢
	積極性
	探求心、向上心またはそれを表現すること(4)
性格・個性（8件）	人見知りが強い
	思いやり不足
	少し乱暴
	素直さ
	周囲へのアピール（おとなしい）
	物忘れ
	こだわり
	職場の雰囲気に流される傾向がある
常識・接遇・連携（6件）	一般社会人としての考え方
	営利団体の職員である自覚
	専門職としての意識の向上(2)
	他部署との連携
	言葉遣い（上司・患者）
その他（5件）	他の学校に比べ学校の特色がなく、貪欲さに欠ける
	学校での実習期間が少ないせいか勤務当初患者を見てとまどう
	特になし(3)

記述を見ると、「短期間で、テーマの決定や統計処理が未消化だったこと」や「現在、役立っていないこと」があげられている。卒業研究は3年次の通年の教科であるが、実質的には臨床実習終了後のわずか数ヶ月で発表会を迎える厳しい日程である。初めての研究を納得のいくテーマで確実に自分のものにするためには、さらに時間的余裕と指導教官との良好なコミュニケーションが必要とされるであろう。今後の課題である。

＜卒業生の自己評価と上司による卒業生の評価の比較＞

卒業生の自己評価と上司による卒業生の評価について、上司の評価が卒業生自身の評価を上回り、また、相関的な一致が認められなかった。これについて、卒業生は経験年数が最高7年の若手理学療法士であり、最も自己評価が厳しい時期にさしかかっている[2]ことが反映しているのではないかと考えられた。また、個々の事例を見た場合、自己評価が「やや劣る(2)」と評価した卒業生7名の上司の評価がすべて「普通(3)」以上であり、自己に厳しい卒業生の態度的側面が上司には好ましく思われる傾向があるの

Akita University

表９　卒業生による本学の改善点（複数回答）

項目	内容
ゆとり	カリキュラム過密、3年制では難しい(7)
（12件）	授業過密(3)
	テストスケジュール過密(2)
授業内容	1年次から専門教育を導入し、2，3年でもっとゆとりを
（10件）	学外の社会に触れる機会(2)
	PNF・ボバース等の手技的なことも詳しく学びたかった
	言語療法学の授業を選択可能にする
	評価の正確性・技術、健常老人やもっと実習で経験したかった
	ROM-T,MMT、動作観察を結びつけて治療したり問題点を見つけていくこと
	生理学実習で実習内容の意図がつかめず、またレポートに対する回答がない。
	もっと臨床に役立つような授業内容
	実用性のある教科書を
実習量	専門科目で実習(実技)を増やす(4)
（5件）	臨床ですぐ応用できる知識・技術
その他	自己学習を強制的に行う必要も。卒業試験などもあっても良い
（5件）	教官によっては知りたいことを得られず、このような意見を述べる機会がない
	他校の学生と知識差がある
	学生の授業の理解度も1年次から調査した方が良い
	実習先での常識(遅刻しない、期限を守る)などもっと指導すべき

表10　上司による本学の改善点（複数回答）

項目	内容
向上心・研究	競争心
（8件）	向上心、探求心を引き出す教育
	積極性
	自分を向上させ、社会的貢献しようとする教育
	問題解決方向など模索する姿勢、研究活動に積極的に関わる
	与えられた業務・課題をこなすだけでなく自分なりに深く掘り下げる
	PTとしての方向性、理想像を持つ
	理想を追求するPT
常識・接遇	相手の目線で物事を考えるPT教育
（5件）	医療人としての倫理性
	患者に対するコミュニケーションも含めて聞く姿勢を持てる社会人教育
	利用者に対する基本的姿勢の教育
	一般常識
能力	様々な観点から物事を考えられる専門家
（5件）	施設に対応できるPTの養成
	就職先に合わせた専門的指導・教育
	立派な臨床家の教育
	基本的知識
ｶﾘｷｭﾗﾑ	特徴的なｶﾘｷｭﾗﾑの設置、4年制大学体制下での充実した制度の制定
（4件）	臨床実習を8週3期へ
	各種在宅サービスに対する教育
	物事に対する積極的探求心・企画力と寛容さを含めた総合的教育

ではないかと推察された。つまり、卒業生が自分に厳しく、真摯に理学療法士として取り組む態度を評価している可能性があると思われた。一方で、上司の評価を上回った自己評価を下した２例の卒業生は、上司と部下として多少コミュニケーションに問題があることも予想された。

Akita University

＜自己評価に影響を及ぼす因子＞

統計結果から、本学での教育満足度や成績が卒業生の自己評価に影響してはおらず、勤務先の変更回数や上司の経験年数が若干自己評価に関係していた。このことから、本学の教育よりも就職後の教育環境などが自己評価に影響する可能性が高いと考えられた。あくまでも推定であるが、自分の意志に限らず勤務先を変更したことによって大きく成長した卒業生がいるかもしれない。実際、キャリアアップを図り勤務先を変更している卒業生も含まれていた。また、上司の経験年数が高いことは、就職後の教育が充実している可能性が高いと思われる。こういったことは、就職後の教育システムの充実を望む本学学生にとって参考になるかもしれない。

＜卒業生の優れている点と努力を必要とする点＞

卒業生は自らの理学療法士としての仕事に関する能力や態度に関する側面は評価できるが、知識や技術、研究発表とこれらを駆り立てる学習意欲について、あまり評価できないと認識していることがわかった。このことは若干経験年数7年までの理学療法士であるなら当然予想されることであり、むしろこの点で満足していないことを肯定的にとらえる方が現実的であると思われる。しかしながら、このような悩みが自己評価の低さにつながる要因になることを考慮すると、本学の教育の中にも研究発表や生涯学習の意欲を植えつけるような教育や卒業後のかかわりが必要と思われる。そのためにも、まず、卒業研究の見直しが必要なのではないかと考える。

一方、上司は卒業生に対して、専門職としての基本的な能力や資質は評価できるものの、知識や技術とその応用や向上心・研究、一般社会人としての態度について努力が必要だと評価していた。知識や技術とその応用については、今後の成長を期待したいところであるが、資質や一般社会人としての態度とはどういったことであろうか。上司の評価では、「常識・接遇・連携」や「向上心・研究」、「性格・個性」といった項目は、優れている点でも努力がいる点でも非常に回答数が多く、合計するとそれぞれに46件、24件が回答している。つまり、良くも悪くも、上司は卒業生の情意領域に関わる部分を非常に重要視していることが分かる。また、卒業生個人によって開きがあることも考えられる。

一般社会人としての態度についての問題は、個々の責任においても教育側にとっても大きな課題である。学生指導においても「最近の若者気質」と呼ばれる問題がしばしば指摘されている[3)4)]。当学科では、こういった問題を是正するために、学生の心の成長を促す取り組みやコミュニケーションスキルに関する授業を検討している。昨今、インフォームドコンセントや医療過誤の問題等、ますます医療従事者にとってコミュニケーション能力や安全管理能力は重要になってきている。今後さらに研究されなければならない課題である。

また、研究・発表とその意欲については、卒業生の自己評価からも同様の回答が得られていることを考慮すると深刻な問題である。前述した卒業研究の見直しや生涯教育を視点に入れた卒後教育へのかかわりが必要になっているのかもしれない。しかし、現状の3年課程による知識注入型の教育ではなかなか解決できない側面もあり、教育全体の変革を必要とするものだと考える。

＜本学に対する改善点と要望＞

卒業生については「本学に対する改善点」を問う質問形式であるが、上司については「本学に対する要望」という質問形式を用いているため、卒業生については具体的な本学への要望と考えられるが、上司の場合は「本学ばかりでなく養成校全体に対する要望である」可能性もあることを初めに付け加えておく。

卒業生による本学の理学療法教育の改善点は、「もっとゆっくり勉強できればよい」という意見が多く、現在の3年制課程から4年制課程への移行への需要を訴えていると考える。また、実習や演習を盛り込んだ実践的な授業に対する意見、さらに、教科目、臨床実習の分野の追加

Akita University

についての意見があり、教育カリキュラムや教育環境の整備・充実が求められていると考えている。

卒業生の上司による本学の教育への要望は、向上心や研究姿勢が一番多く、ついで常識・接遇、能力といったものが多かった。本学においても学生の情意領域や対人技能の教育には特に注目しており、知識注入型の講義からゼミ形式の演習型授業を多く取り入れたり、対人技能に関する授業を計画するなど力を入れている。こういった授業形態はいずれ、「自発的に学習する力」として卒業研究などにも反映され、さらには、卒業後の自己学習能力や責任感のある医療人として発展していくと予想される。今後の成長を期待したいところである。

また、「社会貢献」、「就職先に見合った専門性の教育の充実」という意見については、前述したように現行の3年過程の教育では困難を伴うと思われ、4年制による教育の必要性を示しているものと思われる。さらに、就職後の環境が卒業生の自己評価に影響する可能性が高いことが推察されたので、各勤務先の教育プログラムの充実が検討課題であると思われた。

おわりに

理学療法士の数が年々増え、これに伴って「質の保証(Quality Assurance)」やISOによる国際基準等の用語[5]を耳にする機会が多くなってきた。巷では医療過誤の問題が多く取りざたされてきている。患者の側に立つ優れた医療人の養成のために「自己点検・評価」は真剣に取り組まなければならない重要な課題であると考えている。

文　献

1）秋田大学医療技術短期大学部自己評価委員会 (2000) 第3回自己点検・評価報告書－卒業生と卒業生の上司から見た評価－、秋田大学医療技術短期大学部, 33-52.

2）川崎くみ子、他 (1999) 弘前大学医療技術短期大学部看護学科卒業生の追跡調査(3)－就業状況と職務満足度（第1報）－、弘大医短紀要 第23号、51-62.

3）荻島久裕 (2000) 情意領域の教育、臨床実習の手引き第4版、社団法人日本理学療法士協会、53-61.

4）立本久美子 (2000) 臨床実習を巡る学校教育の現状と課題－本学の学生の意見と実習成績から－、理学療法学 Vol.27, Supplement No.2, 361.

5）岩崎　榮 編 (1998) 医を測る－医療サービスの品質管理とは何か、厚生科学研究所.

Akita University

An Evaluation of the Education of the Department of Physical Therapy College of Allied Medical Science from Graduates and their Superiors

Sachiko UEMURA Shunsuke KUDO Shinichi SHINDO
Saichi WAKAYAMA Masahiro SATAKE Hideki MOMIYAMA
Yukihiko OSAWA Hitoshi INABA Takanobu SHIOYA

ABSTRACT:

We analyzed the results of the third self-examination and evaluation questionnaire of 1998, surveying graduates and seniors in the graduates' workplaces. The questionnaire subjects were 114 graduates and their seniors. The questionnaire recovery rate for graduates was 40% (46 persons), and for seniors 42% (48 persons). The total evaluation of the graduate was over 3 points in all cases. However, the evaluation of graduation research was low with 2.5 points, indicating that reassessment and examination would be necessary. In the questionnaire targeting the seniors, they gave a high evaluation with an average of 4.2 points, but it was clear that there were some problems with the aspect of the graduate's attitude as a member of general society.